

あの日 の頃

私の原点



● 廣田商事
社長 廣田 稔

父が教えてくれたこと

福岡市中央区港。「軍艦マーチ」が鳴り響き、大漁旗がはためく漁船数十隻が、玄界灘の大海原に向け出港する。船と陸をつなぐ紙テープは漁師と安全に帰港することを願う家族の思いを結んでいる。漁師の街で生まれ育った私の幼少期はこういった風景が日常的

だった。小学校の友人は漁師の息子がほとんど。もちろん私も、祖父が徳島県遠洋底引網出漁団の船主で、長崎県五島の玉之浦を基地として東海や黄海を主漁場に活躍していたが、福岡市の要請を受け新基地「博多漁港」に移転してきた。

昭和30年代を全盛期に、多くの漁師がこの街に集い、福岡の漁業を支えてきたが、私が生まれた1963年以降は衰退の一途をたどった。父が祖父の後を継ぎ、水産会社「廣田漁業」の経営の舵を取るころには、船舶十数隻、船員150人の規模になったが、中国



▲現在の福岡市中央区港の風景



や韓国が自国の海域を主張して拿捕事件が相次ぎ、廣田漁業の船も拿捕され一時、倒産の危機に陥った。銀行の貸し付け担保となる不動産を所有するため、市内の物件を一件ずつ探し歩き不動産事業に経営を移行しようとする父の苦労があったとは、幼少だった私には記憶すらない。

内気で病気がちだった私は、養子小学校時代に地元の野球少年団に入り、夜も明けないうちに家から西公園までの早朝ランニングは欠かさず、公園の光雲神社から鳥居がある坂を何往復もして、映画「ロッキー」の主人公のように体を鍛えることに夢中になった。そのころ、西公園近くにあった小さな広場は小学生の遊び場と化し、草野球や秘密基地などをつくっては思う存分遊び、日が暮れると家に帰った風景は今となっては懐かしい。

当仁中学校時代は、漫画「エースをねらえ」の影響もあって、軟式テニス部に所属。成績は残せなかったものの大濠高校でも硬式テニス部でテニスに明け暮れ、3年生時には団体で強豪・柳川高校とともに全国高校選抜テニス大会に出場することができた。

福岡大学法学部に入学しても、あえて練習の厳しい体育会の硬式テニス部に入り、勉強そつちのけでテニスに没頭。体育持待生と同じ環境でハードな練習を乗り越え、4年生では主将も務めた。ある

程度の成績も残せたが、自分の中で、テニスをやり抜いた経験は社会人になった今でも大きな自信になっている。家業を継ぎ、福岡青年会議所に所属して03年に理事長になったことや06年から3年間、アジア太平洋子ども会議・イン福岡の実行委員長を務めたことも「一つのことを精いっぱいやり抜く」精神がそのころ、養われたからだと思う。

大学時代、あえて厳しい環境を選択した理由をふと考えた。それは父の存在が大きい。父は情に流されず、理を求める性格で群れることが好きでなかった。人が寝ている夜明け前から仕事に行って、夕方ころに家に帰り、夕食時には母に仕事や時事問題など真剣な話を2時間位して、寝室で読書に没頭、父とは面と向かって話した記憶もキャッチボールをした記憶もない。小さいころはよく怒られたが、人に迷惑をかけず、自己責任が強い姿勢を子どもながらに感じ、無意識に実行していたのかもしれない。

そんな父が肺がんを患って99年に息を引き取った。遺言も残さなかったが、生前から「日記にすべて書いてある」と言っていた。最近、初めてその日記を読んだ。すると「昔は「時は金なり」「早起きは三文の徳」など、時間を大切にする格言も多かった。しかし現代の日本は豊かになったために時間を有効に使う風潮は消えてしまった」と書いてある。

厳しい存在で煙たいと思った時期もあるが、限りある時間を精いっぱい生きた父の生き方に自分も近づきたいと改めて感じた。